

遺稿 小野寺繁郎さんを偲んで…

小野寺繁郎さんを偲んで…

徴兵検査から終戦までの思い出

“小野寺幹部候補生の6箇月”

小野寺 繁郎 (昭和17年電気科卒)



徴兵検査は昭和19年(1944)6月で、現役兵としての入隊は昭和20年3月、復員は昭和20年8月末であった。

1. 徴兵検査

検査の日は大雨で道路が通れなく、木材運搬用の軌道を通って隣の和田町の検査会場にようやく到着した。検査する人は40人位で、私の結果は甲種合格だった。

会場には支那事変の戦争未亡人も列席していたが、検査の友のその母親の姿から、思いは複雑だろうと感じたのであった。

2. 壮行会

物資の無い時代だったが、壮行会はやっていた。酒は必要品、配給の清酒では全然不足で最後の頼みはドブロクの密造酒だった。税務署対策は、駐在所の巡回を主賓に招いたりして知恵を絞ったようである。

祖母から聞いた話だが、魚はおかしら付きと祖父が言いだした。川魚の捕獲期は5月以降なのだが、2月の初めに近所の人が渓流の上流の雪を踏みしめ、伝統秘法を駆使して粒の揃ったやまめを捕ってくれた。

また近所の佐竹藩の藩士の出だと云う隠居さんが、一句を示して語ってくれた。

“捷(か)ち戦 三月いわなの かしら付き”

魚は立派なものであった。一生懸命に孫の安全を祈ってくれた人に感謝しなければならないと語っていた。

ここに文選(もんぜん：中国古代の詩文集)の歐防建の詩を示し、私の複雑な気持ちを表現したい。

“紙を執(と)れば、五情塞がり

筆を揮(ふる)えば、涕(なみだ)汎瀾(がんらん)たり”

3. 入営

3-1 秋田から櫛ヶ浜(徳島市：軍事訓練拠点があった)まで

入営の出発である3月3日は歓呼の声に送られ、国民服の腹に千人針、祈武運長久と大書きした寄せ書きの日章旗を振り我が家を出発した。

3-2 入営初日

名簿によりブロック毎に分けられて、准尉に引率され内務班の班長に引渡された。これが第3中隊第1小隊3班である。

内務班は初年兵、古年兵40名の寝起きや食事のする板敷きの大部屋で、片方に10人が足を合わせた格好で寝るようになっていた。足の方が通路で頭の方は棚で仕切られ、被服・日常品が整理されるように工夫されている。やがて班長・上等兵より渡された軍服に着替え

る。これで帝国陸軍二等兵の誕生である。

初日のお昼は赤飯におかしら付き・味噌汁で「お客様扱いは今日限り」と嫌味を言ながら古年兵が世話をしてくれた。

昼食後、外の広場で中隊長の軍事勅諭の棒読みがあり、型通りの訓示を受け班に戻る。しばらく休憩後夕食、その後毛布で寝床の作り方を教えてもらい、8時に「総員何名現在何名」の日夕(にっせき)点呼が行われた。9時に消灯ラッパが鳴り、初日の一日が終わつたのである。

3-3 日常の軍務

軍隊の生活はラッパで始まる。すばやく行動して人に遅れをとらないようにする必要がある。6時の起床ラッパで起き、先ず自分の毛布を片付けて軍服を着る。慌しく廁・洗面を済ませる。「〇〇二等兵洗面所に行ってまいります」、帰つても「・・・戻りました」の申告である。大勢が大きな声を出すこの時間は、騒々しく蜂の巣をついた状態である。

朝の日朝点呼のラッパで全員が廊下に整列し、「第3班員40名、使役2名、現在員37名、異常無し」と、次に「番号」の班長の声が続き、各員が1,2,3・・・の番号を叫んでいく。注意事項などを伝達してやがて朝食、一日の訓練が始まる。昼食は内務班に帰つてとるが、午後の訓練が始まる1時までが忙しい。古兵の洗濯もあるので大変である。

5時までの午後の訓練後夕食をとり、その後がまた忙しい。銃器の手入れ、軍靴の手入れは古兵の分も当然で、入浴ができずタオルを濡らして、入浴したふりするなど色々苦労をした。

8時の点呼から消灯まで30分の自由時間には、昔のように古兵の派手な苛めは無かった。幸い幹部候補は下士官室で半強制的に学習させられていたので、魔の時間には避難していたようなものだったから助かったと言うべきか。

3-4 幹部候補生

幹部候補生の制度は昭和2年の兵役法制度改定から存在していたようで、私は第14期として合格し上等兵の襟章を受けたが、甲乙の判定(甲：将校、乙：下士官)の前に終戦を迎えたのである。

4. 復員

8月15日の終戦から、色々なデマが飛び交った。船舶兵は米国の輸送業務を担当させられる。幹部候補生は残されて、米国で働くされるなど、根も葉もない事だったがかなり心配した。

復員の日が決まり物資の配給があった。軍装一式新品、米一升ばかり袋詰め、砂糖飯盒に八分目、清酒水筒に満杯。部隊は人員・物資の補充基地を担当していたようで、倉庫の在庫品の処分をしたものだと思う。

櫛ヶ浜から列車は有蓋貨物車で、途中駅に長々と留まる事もあり品川駅まで2昼夜近く要したと思う。品川駅に到着して、清酒入りの水筒が無い事に気が付いた。当時酒を飲まない私は、水筒の事は余り気に掛けていなかった。紛失か、盗難か?

江戸川区の叔父への大事なお土産の無い事を理由に、予定を変更して一路秋田に帰る。弟思いの父は叔父の様子が気になっていたようである。「酒は残念だったが、米、砂糖だけでも“弥三郎”に置いて・・・良かったのに」との父の言葉は今でも思い出す事があり、秋田と東京に離ればなれで苦労した兄弟の愛惜をしみじみと感じた。

本記事は、著者が亡くなる前に寄稿頂いたのを掲載しました。

追悼寄稿

さようなら小野寺さん 「ほ・じ・な・し！」

佐藤 葉子



佐藤葉子さんは、小野寺さんが度々訪問した小学校の恩師宅のご息女

8月の初めに小野寺さんの訃報に接しました。
(平成24年7月22日御逝去 享年88歳)

「再びの走破記録に挑む君、
ただひた走る勇姿は清(すが)し」

小学生の時から走ることが得意で生涯走り続け、マスターズ陸上選手権大会ではたびたび大会新記録を樹立し、常に輝かしい記録を残されました。逝かれの直前まで走り続け、お幸せな陸上人生だったと思います。

読書が大好きでとても博識で、随分勉強家だったとお見受けしました。同窓会誌「金砂」に寄稿を頼まれると推敲を重ね、練りに練った文章表現をしていました。

小野寺さんは並外れて義理人情に厚い方でした。その証として、父亡きあとも70余年変わることなく親しくお付き合いを頂きました。父・母そして私に楽しい時間を下さってありがとうございました。秋田の大雪や地震情報が報道されると必ずお見舞いのお電話を下さり、惻隱の情というのは肉親以上ありました。

想い出の中に、毎年我が家を訪ねお参り下さった折のエピソードがあります。授業中に間違えると、この「ほじなし」と父に怒鳴られたことがいつまでも忘れられず、それでも父をこよなく慕って下さいました。「ほじなし」と言われ続けた小野寺さんは、小学校の卒業式で答辞を述べ首席で卒業したそうです。

生家が老舗の和菓子屋さんだったせいか、羊羹や饅頭など甘いものが大好きだった小野寺さん、中でも甲府の枯露柿が大好きな物でした。もうお届け出来ないとと思うと寂しい限りです。

小野寺さんは本当に優しくシャイな方でした。私の父のようであり、兄のようでした。どうぞ安らかにお休み下さい。さようなら小野寺さん。いっぱいのご慈愛ありがとうございました。小野寺さんに出会ったことに無限の感謝を込めて。合掌。



「金砂」Vol.20に掲載の小野寺さん力走の写真

■佐藤葉子さんが、小野寺さんの「ほじなし！」の想い出を朝日新聞のコラムに投稿したのを紹介します。

—平成8年(1996年)11月25日

朝日新聞コラム「ティムさん」より

9月半ばに、読者のSさんより、おはがきをいただいた。小学校の教師だったお父さんの教え子が、Sさんを訪れたとき、その昔勉強中に間違えると、お父さんに「ほじなし！」と怒鳴られたそうで、そのことばが今も懐かしく忘れられない、とおっしゃっていたというのだ。

今の若い先生たちは、「ほじなし」ということば自体知らない。また、標準語で生徒を叱つたら、差別用語だと親たちに糾弾されかねないし、生徒に袋だたきに遭うことだってあるかも知れない。人々の心の中で「ほじなし」と言われたことを懐かしむような余裕があれば、世の中ももっと円滑に進むんだろう。

僕は、小学校のころ算数が苦手で、教師だった父や家庭教師の学生を随分てこすらせたものだ。僕が「ほじなし」に当たる英語の四文字のことばを、相当浴びせられたに違いないことは、僕が忙しくて絵の道具や機械、家具にまでハツ当たりして吐くことばを聞けばよく分かる、と妻が言う。

僕はSさんのお父さんのように、いつでも生徒に覚えていてもらえるような教師でありたいけれど、ちょっと無理かな・・・

文：ティム・アーンスト

訳：逸子・アーンスト

生前小野寺さんに寄稿いただいた「金砂」の記事

KANASA Vol.8 p7-p8



KANASA Vol.20 p15

